教室から始める ウェルビーイングな社会

11人の社会人が向き合った多様な生徒の「ありのまま」の学び

福岡県立ありあけ新世高校 定時制課程

総合的な探究の時間 中間発表の様子

●様々な興味・関心を各生徒が探究

◎探究テーマ例

- 製菓の魅力
- 現代建築の魅力
- ピアスについて
- 記憶について
- やる気を出すには
- 瞑想について
- メイクの変化

●生徒の「ありのまま」を認める

◎全員に表彰状を授与

CERTIFICATE
会場共感賞
PRESENTED TO
殿
あなたは令和４年度３年「総合的探究の時間」中間発表において
諸書の成績を収められましたので表彰します
令和５年３月１６日
福岡県立ありあけ新世高等学校　定時制課程

◎審査員のコメント例

深いテーマでした。数年後、ふとした瞬間に答えが出る。そんな問いのような気もします。これからもこの問いを大切にしながら迷走していただきたいなと思いました。ちなみに私は、「なぜ生きているのか」を８年間くらい考え続けました。ある日突然答えが出ました。

社会人と高校生が1対1で対話する探究学習の発表会

2023年3月、福岡県立ありあけ新世高校定時制課程の3年生全11人が、「総合的な探究の時間」の中間発表を行った。それは、各生徒がこれまで取り組んできた探究テーマについて、15枚程度のスライドを使って約5分間で発表するもので、内容は就きたい職業に関することや、興味・関心のあること、生活の中で抱いた疑問など、多岐にわたった。

中間発表には、オンライン会議ツールを使って、大学教授や経営者団体の理事、NPOの代表など、様々な分野の専門家が社会人審査員として参加した。社会人審査員の人数は、1対1で生徒と向き合えるよう、生徒と同数の11人とした。発表後、社会人審査員が入れ替わりながら、卒業年次となる4年次の探究学習につなげていくための助言を生徒一人ひとりに行った。

中間発表を企画した定時制課程3学年担任（当時）の前川修一先生は、「社会人の方々には、発表内容の審査以上に、生徒との対話を期待した」と語る。

「発表を通して、生徒のありのままに向き合い、よく頑張っているねと褒めていただきたいと思いました。生徒にとって、各界の第一人者に今の自分を受け止めてもらう経験は、生きる自信を得る機会になると考えたのです」

主幹教諭・教務主任兼4学年担任
前川修一
まえかわ・しゅういち
同校に赴任して5年目。地理歴史・公民科。

学校概要

設立　2003（平成15）年
形態　全日制・総合学科／定時制・普通科／共学
生徒数（定時制）　1学年11人（2023年度4年生）
2022年度卒業生進路実績（定時制）　専門学校進学1人。就職2人。その他2人。

ウェルビーイング＝身体的･精神的･社会的によい状態にあること。短期的な幸福のみならず、生きがいや人生の意義などの将来にわたる持続的な幸福を含む概念。（文部科学省「新たな教育振興基本計画【概要】（令和5年度～9年度）」より）

審査員として参加した社会人の声

大学の研究室からオンラインで中間発表に参加し、生徒の発表に講評を述べる杉森公一教授。

自分の中に生まれた否定的な感情から目をそらさなかった経験を語った生徒とは、「そういう思いを言葉にできることが素晴らしいね」と、その生徒の成長を後押しするような気持ちで話をしました。また、自分の好きなものについて楽しそうに語った生徒とは、もっと知りたくなった私の気持ちを伝え、一緒に深めていきました。審査員や大学教授としてではなく、学ぶという意味で自分は生徒と対等の存在なのだと思いながら、一人ひとりと向き合いました。「自分と同じ、学ぶ人だ」と生徒に思ってもらえたのならうれしいです。

東京大学大学院教育学研究科教授
栗田佳代子

生徒たちは、自分が本当に取り組みたいテーマについて探究していました。今回の発表がきっかけでそれぞれの人生が変わるかもしれないし、1人の人生が変われば、社会が変わるかもしれない。私は心から感動しました。探究学習のサイクルの回し方やテーマの学術性に目が向きがちですが、人生を変える探究こそ、すべての高校で取り組んでほしい学びだと思います。11人の発表を聞いた後、私は、自分が全員の生徒の名前を覚えていることに気がつきました。様々な探究の場面に立ち会いましたが、初めての経験でした。

北陸大学高等教育推進センター長・教授
杉森公一（きみかず）

審査員として心がけたのは、生徒に心を開いてもらうことでした。生徒の「今」を肯定し、それぞれの発表のよいところを具体的に指摘しました。すると、どの生徒も私の言葉を素直に受け止めてくれました。建築、ピアス、製菓……、どれも私は詳しく知らないテーマですが、私が「もっと知りたい」と尋ねると、どの生徒も楽しそうな表情で、発表し切れなかった話を聞かせてくれました。発表に対する一方的な講評ではなく、生徒と対話ができたことがうれしかったです。

宮崎県立宮崎東高校 定時制課程夜間部教諭
西山正三（まさみ）

温かく認められることで、学び続ける力を得る

生徒たちは、過去に不登校を経験したり、中学校までの基礎学力が十分に身についていなかったり、対人関係の構築が苦手だったりと、それぞれ困難や課題を抱えている。

「どの生徒も、高校で徐々に自己肯定感や自己有用感を取り戻しています。それでも今後、壁にぶつかった時に、『どうせ自分は……』といった言葉が頭をもたげることがあるかもしれません。そんな時に立ち直るために必要なのが、成功体験です。そこで、講評を通して、やり遂げた、認められたという喜びを生徒に味わわせてくださいと、社会人審査員にお願いしました」

前川先生は、定時制の生徒の多くにとって、大学受験は学びの動機づけにならないため、課題やテストを使って学びに向かわせることが難しいと説明する。しかし、「それぞれの生活の中で生まれた興味・関心や喜怒哀楽に教師が共鳴すると、学びに没頭し始めることがある」と前川先生は言う。そのため、11人の社会人審査員が「ありのままの自分」を語る生徒の発表に耳を傾け、興味・関心を示し、温かな言葉をかけてくれたことがありがたかったと、前川先生は振り返る。

「ある生徒が発表後、『たくさんの先生に褒めてもらえてうれしかった。探究をさらに深めるアイデアを生活の中で見つけて、次の最終発表につなげたい』と振り返っていました。高校入試当日、ほかの人と話すのが苦手で、壁に向かって休み時間を過ごしていた生徒も、社会人との対話を楽しんでいました。人は皆、成長のタイミングやペースが違います。私たち教師は、よりよい学びの環境をつくったら、あとは生徒を信じて待てばよい。そのことを改めて生徒に教えてもらいました」

生徒たちの発表内容や社会人審査員が生徒にかけた言葉、そして探究学習を通して生徒に学ぶ力を取り戻させていった前川先生の指導について、ウェブオリジナル記事でぜひご覧ください。
https://view-next.benesse.jp/view/web-hs/article16393/

〈本コーナーは隔号連載です。次回は12月号の予定です〉